

## 韓国の統一試験と英語リスニング・テスト

研究開発部試験臨床研究部門 林 篤 裕

研究開発部試験環境研究部門 内 田 照 久

独立行政法人大学入試センター試験・研究統括官 浅 野 攝 郎

### 1. はじめに

1979年(昭和54年)にスタートした共通第1次学力試験は、制度の変更に伴い1990年(平成2年)には大学入試センター試験として再構築され、この間に合計で26回の統一試験が実施された。大学入試センターが管理・運営するこれら統一試験におけるリスニング・テストについては、長年にわたり検討されてきたものの、その実施規模や公平性の観点から導入は見送られ現在に至っている。しかし、昨今の国際化やグローバル化の潮流の中で、大学入試センター試験に英語のリスニング・テストを導入すべきであるという意見は根強く、慎重な議論の末に結局2006年(平成18年)から導入されることとなった。

一方、韓国で実施されている統一試験では、50万人以上の受験者に対して

1994年からリスニング・テストを導入し、数々の経験を積んでいる。

そこで、我々は2003年(平成15年)12月に韓国の試験機関や大学を訪問し、韓国の統一試験とその中で実施されている英語リスニング・テストについて調査を行ったので、それらを報告する。

### 2. 韓国の入試制度と大学修学能力試験

#### 2.1 教育を取り巻く状況と入試制度

韓国の教育制度は、小学校6年間、中学校3年間、高校3年間、大学4年間であり、中学校までが義務教育であることも含めて日本と同じである。また高校入試ではクジを使うこと等によって、特定の高校に人気が集中することがないような配慮がなされていた時期もあったようであるが、現在は選抜試験が復活している。

以前の日本と同様かそれ以上に学歴を重んじる風潮があるため、大学への入学準備段階である中等教育における受験勉強熱は非常に高い。特に高校三年生では「四当五落(睡眠時間が4時間の人は合格するが、5時間の人は落ちるの意)」どころか「三当四落」とも言われており、早朝から深夜まで高校に詰めて受験勉強をしていたり、これに加えて塾や予備校、家庭教師を付けている場合も珍しくないようである。

首都ソウルとその周辺には多くのものが集中しており、総人口4800万人の内の24%がソウルに、首都圏に広げると45%もの人が住んでいる。また、製造業の55%、金融機関の65%、公共機関の82%が集中しており、386校の大学の内42%が首都圏に存在する。学生も「ソウルの大学に行く」ことが一つのステータスになっているようで、逆に地方大学では定員割れや教員数を減らす措置等が取られている。難関大学としては、国立のソウル大学校 (Seoul National University)、私立では高麗大学校 (Korea University)、延世大学校 (Yonsei University)、西江大学校 (Sogang University)、梨花女子大学校 (Ewha Womans University) が、また、工科大学としては韓国科学技術院 (Korea Advanced Institute of Science and Technology, KAIST) が有名である。なお、男子には兵役があり大学

での教育に少なからず影響を与えているようである。

韓国の年度は3月から始まり、入試の行なわれる時期としては、3回ある。統一試験は11月に実施されるが、これに先立つ6月と9月には推薦試験が行なわれ、後者では統一試験の成績が資格試験的に利用される。個別大学の一般選抜試験は12月から2月にかけて実施されるが、受験者は統一試験の成績を基に出願大学を決めている。

また特徴的なのは推薦入学者の割合の変化であり、10年前は入学者の34%程度であったものが、現在は40%を越えており、今後も増加すると予想されている。この要因としては、高校側の推薦特性が年を追う毎に大学側で把握できつつあるからのようで、大学の求める学生が推薦入試で確保できているということが判る。

韓国の統一試験は「大学修学能力試験 (College Scholastic Ability Test, 以後CSATと略)」の名称で、韓国教育課程評価院 (Korea Institute of Curriculum & Evaluation, 以後KICEと略) が実施している。韓国では個別試験において、筆記試験ではなく実技や小論文、面接と言った試験を行うことが推奨されているため、CASTが主たる筆記試験となる。KICEも元々は国の機関として発足したが、6年前にエージェンシー化され現在に至

っている点では、(規模や業務範囲は異なるが)大学入試センターと似ている。

## 2.2 大学修学能力試験(CSAT)

CSATは大学教育のための能力を測定することを目的として、年に1度、11月はじめに実施されている高校卒業者を対象とした統一試験であり、追再試験は行なわれない。特徴としては、以下の2点が挙げられる。

- (1) 高校で獲得した包括的な知識をカバーしている。
- (2) 特定の学科目試験ではなく総合型の試験である。

この試験は、必須である「主要領域」に4コマ、選択である「オプション領域」に1コマの計5コマが用意されている。主要領域には、言語領域、数理領域、社会探求領域、科学探求領域、外国語領域(英語)があり、社会探求領域と科学探求領域は志望に合わせてどちらかを選択することになっている。また、オプション領域には第二外国語領域として、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、日本語および中国語が用意されている。リスニング・テストは言語領域と外国語領域にそれぞれ15分と20分が設定されているが、第二外国語領域にはない。解答方式としては、数理領域の一部に記述式(短答式)がある程度で、それ以外の設問は多肢選択形式(選択肢数5)である。また、

受験系列として、人文系列、自然系列、芸術・体育系列の3つが用意されており、志望学部によって選択する。

各領域の設問数は30~80設問、素点は80~120点、試験時間は70~120分であり、主要領域全体としては、220設問、400点、380分である(表1)。また、第二外国語領域は30設問、40点、40分である。朝8時過ぎの入室から始まって、第二外国語領域の終了が18時過ぎと1日間に収まるように時間割りが組まれている。

試験問題は全て初出問題のみで構成され再利用されることはなく、問題冊子も持ち帰ることができるが、実施後にはKICEのホームページ(<http://www.kice.re.kr/>)上でも公開される。リスニング・テストの音声問題についてもダウンロードすることによって、聞けるようになっている。

なお、参考までに2003年11月6日に実施されたCSAT-2004の規模を記しておく。志願者数674154人、73地区、876会場、21710教室で行なわれ、各地区の教育委員会に委託されて実施された。高校の教室を利用しているため1教室当りの人数は31.1人/教室であり、大学を会場としている大学入試センター試験(67.2人/教室)の半分以下である。韓国の全大学386大学が入試に利用しており、検定料は20000Won(約2000円)であった。

志願者数の推移は1999年頃の89万人をピークに減少傾向にあり、現在の競争率が1.2倍程度とのことで、その原因としては、少子化に加えて大学に進学しない者の増加が挙げられる。

## 2.3 作題システム

CSAT-2004を例にその作題システムの概要を述べる。CSATの作題には300名以上が関わっており、出題、総括副、評価副、領域副(6領域に1人づつ)の各委員長には、大学教授か評価院の研究者が就任している。委員としては、企画、評価、出題、検討、潤文の各委員が任命されており、その中心である出題委員は160名程度おり、大学教授8割、高校教員2割から構成されている。なお、高校教員の役割は難易度を判断することに重点が置かれてお

り、2年前から出題委員に加わるようになった。また、試験問題の点検を担当する検討委員は全員高校教員であり、人数は出題委員の半分程度である。文章表現等の用字用語の点検は潤文委員が担当するが、彼らは言語領域の検討委員との兼務である。完成までに試験問題のチェックは3回行われ、また予備問題も作成される。ただし、予備問題が翌年以降に再利用されることはなく当該年で破棄される。

非常に特徴的なのはその作業体制であり、試験実施日に向けて、委員の招集に始まり、作題、印刷、配達という一連の作業を1ヶ月ほどの綿密なスケジュールに基づいて遂行される。しかも、彼らの作業場所は完全に秘匿されているが、実際は宿泊環境の完備された施設に出題本部を設置しているよう

表1. 各領域の概要

領域	設問数	素点	試験時間	備考
言語領域	60	120	90	5肢選択 リスニング・テスト(5設問)
数理領域	30	80	100	5肢選択 短答式設問(6設問)
社会探求領域 科学探求領域	80	120	120	5肢選択
外国語領域(英語)	50	80	70	5肢選択 リスニング・テスト(17設問)
主要領域合計	220	400	380	
第二外国語領域	30	40	40	6ヶ国語から1つを選択 リスニング・テストなし

である。CSAT関係者は全期間にわたって完全に拘束され、携帯電話をはじめとする私物の持ち込みが禁止されているのは勿論、インターネット等を使った外部との連絡も取れない体制が敷かれている。

試験の難易度は、上位50%の受験者の平均が75%の得点率になることを目標に作られてきたが、来年度からは全体平均を60%とするように変更される。出題範囲や個別単位ごとの割合、また設問数や配点割合に関するガイドラインが用意されており、それに従って作題されている。

また、設問内容は同じであるが、正解となる選択肢番号(位置)が異なる2種類の冊子が作成される(偶数問題、奇数問題という呼び方をする)。これは試験会場で隣接して着座した受験者の解答やマークシートを盗み見て転記しても、加点されないようにとの工夫から、このような形式が採用されている。

#### 2.4 成績報告書と成績データの提供

KICEは、試験実施1ヶ月後の12月初旬にCSATの成績報告書(スコア・レポート)を受験者に通知する。成績の表現方法には5種類あり、それらは素点、パーセンタイル、標準化されたT-スコア(日本で言う偏差値に相当)、重み付きの標準化されたT-スコア、そしてCSAT-2002から導入され

たStanineである。素点は、合計成績(400点満点)とコマ毎の成績(80点~120点満点)が返される。また、Stanineとは「"Standard" "Nine"」からの造語で、平均5、標準偏差2の正規分布に当てはめたときの、区間幅0.5のどの区間に位置するかを示した9段階の階級スコアである。

また、個人への通知と平行してKICEは各大学にも成績データを提供する。大学へは暗号化済みのデータが収録されたCD-ROMが配布され、受験者の住民台帳番号で検索ができるようになっている。前述の5種類の成績の利用方法や重みについては各大学が事前に公表している。

#### 2.5 CSATの将来(CSAT-2005)

韓国の入試制度は比較的短期間で改訂されることが知られているが、2004年11月に実施される試験からは第7次のカリキュラム改革に対応した入試に移行することが決まっている。今回の改編は大幅なものであり、入試科目も見直され、今までの総合試験型から科目別試験型へと移行する。職業科目が多数導入されるようで、科目数も大幅に増えて50科目近くになるとのことであるが、実施日程は1日間のままとのことである。

数学領域を例にとると、出題範囲の異なるTypeAとTypeBの2つの試験問

題が用意される。TypeAは「Mathematics I」を中心とした試験であり、TypeBはこれに加えて「Mathematics II」ともう一つの選択範囲を包含した試験となる。具体的には、前者は基礎的な範囲をカバーし、後者は自然科学や工学と言ったより高度の数学を必要とする学生用の科目となる。

### 3. 英語リスニング・テスト

#### 3.1 試験構成

英語のリスニング・テストは、英語の試験時間全体70分中の20分以内を目安に構成されている。実施にあたっては、先にリスニング・テストが行われ、放送の最後に「これでリスニング・テストは終了」というメッセージが流れて、引き続き筆記試験となる。リスニング・テスト部分の配点は毎年若干異なるが、CSAT-2004の例で言えば、80点満点中の27点であり、設問数では全体50問中の17問である。したがって、時間的にも配点的、設問数的にも英語試験の約1/3をリスニング・テストが占めていると言え、1997年度以降は、ほぼこの割合で英語の試験が構成されている。

リスニング・テストで聞かせる英語の語彙は、高校の教育課程でよく使われる2000単語を目安としている。そして、設問あたりの単語数は100語程度で、問題文の音声の放送は一回限りである。

#### 3.2 作題体制とネイティブ・スピーカー

リスニング・テストで用いられる英語は、アメリカ英語を基本としている。作題時には必要量の2倍にあたる34問を作成し、うち17問は予備問題として非常時に備えられる。

出題委員は、過去の作題経験を考慮して任命され、英語母話者としてアメリカ人1名が含まれるように配慮している。これとは別に、音声録音に携わる英語ネイティブ・スピーカーを、大学教員の中から男女各1名任命しており、毎年交代させている。このネイティブ・スピーカー自身が問題作成に携わることはなく、録音作業のみに従事する。なお、問題説明などのハンダ語の部分は、別途、プロのアナウンサーに依頼している。

問題内容の秘匿のため、ネイティブ・スピーカーも出題委員と同様に、試験終了まで拘束される。とはいえ、作業日程の関係から、出題本部への入所は出題委員よりも遅いため、実質的な拘束期間は半分以下とのことである。

#### 3.3 音声収録から配布媒体の作成まで

出題本部の置かれた施設には、録音機材一式を搬入し録音編集環境を開設している。この機器を運用する技術者は録音業務を専門に行っている企業から派遣されており、全体の監督者、録

音担当者、編集担当者、そして機器操作担当者らが、録音編集の実務を分担して作業している。試験問題の漏洩防止のために、これら技術者も録音機器設置以降、試験実施が終了するまで出題本部に拘束され、試験問題の秘匿を担保している。

音声収録時には、リスニング・テストの問題作成者も録音現場に立ち会い、話者に細かな指示を与える。しかし、問題内容スクリプトの語句などの修正を行うことはほとんどない。

音声収録後、リスニング・テストの進行に合致するように編集を行ない、マスター版にまとめあげる。そして、全国の試験会場で使用されるカセットテープの大量複製までをも、出題本部内に設置された機器で録音編集作業と同様に行われる。各試験場用のカセットテープは、試験会場ごとに4本ずつ準備し、その内3本は予備用である。全体ではおよそ4500本を作成することになる。なお、録音内容の確認は、テープ確認専門の録音委員が担当するが、その確認対象はマスター版のみである。

### 3.4 実施時の音響環境

1997年以降は、試験会場となる高校の教室での一斉放送設備を利用してリスニング・テストを実施している。各試験室のスピーカーは教室の前面に2台設置されている形態が一般的である。

なお、不測の事態に備えて、全試験室にカセットテープ・プレーヤーを準備している。ただし、試験用カセットテープが全教室分用意されている訳ではない。

放送のための機器操作は、試験場となる高校の放送担当教員があたっている。また、校内放送を用いた試験実施時の音量調節なども、各試験場に一任されている。なお、試験場として使用する高校の放送用機器は、優先的に教育庁が修理、改善している。高校間での校内放送機器の品質の違いは、時々見受けられるが特段の対応はしていない。

試験会場での座席位置による聴き取り具合の差について特に対処策を考えていないが、現在までのところ座席位置を理由にした苦情はない。また、試験室廊下側の座席の使用を控える等といった対策も取っていない。

その一方で、リスニング・テスト実施のための環境整備は国家レベルで行われており、テスト実施時には航空機の飛行や船舶の汽笛、緊急車両の通行なども制限を受ける。さらに、電力会社へ試験日を連絡し、停電などが起こらないよう配慮を求めている。リスニング・テストの実施を円滑に進めるための各種対応について、毎年、教育庁から関係省庁に協力を依頼している。

### 3.5 実施時の配慮と措置

試験実施中の携帯電話の取り扱いについて、監督者においては監督業務への意識が高く特に問題はない。一方、受験者に対しては、持っている全員の携帯電話を試験開始前に集めて、試験終了時まで全て預かる措置を取っている。

教室内で生ずる騒音のうち、クシャミやセキなどのやむを得ない騒音に対して、風邪などの症状がある者は、本人に了解をとり別室受験を行うこともある。また、試験室内で騒ぐ等の者が居たら、試験室を別室にするなどの措置を会場ごとの試験本部長(高等学校長)の判断で講じることができる。

試験実施時点で問題訂正が生じるようなことがないように、実施直前ぎりぎりまで修正作業を行っており、現在までのところ試験開始後に問題訂正を行なうような事態は起っていない。

聴覚障害者に対する措置として、多少聴こえる受験者に対しては、補聴器を使用させて受験させている。全く聞こえない受験者に対しては、音声部分を印刷した筆記試験問題で受験させている。視覚障害者には点字問題を用意し、試験時間は通常の1.5倍を与え、また、弱視者には拡大問題冊子を用意し、試験時間は通常の20分延長で実施している。聾啞者に対するリスニング・テストは代替問題を用意している。肢体

不自由者にも、同様の延長措置を取っている。

### 3.6 実施後の対応

実施後における教室内外の騒音や音響面に関連した受験者側からの申し出としては、会場によって聞こえ方に差異がある、残響音で聞き難いといったもの等が報告されている。そのような苦情は、言語領域(韓国語)よりも、英語の方に多い。

各種苦情などに対してKICEでは、現場調査を実施し不備のある試験会場には改善を要請している。高校の放送設備についても2年前から調査を行ない、整備を教育庁に申し入れて改修させたりする。これまでのところ、実施上の不備や事故のために、特定教室の受験者に得点調整などを行った例はない。

## 4. まとめ

今回我々は、韓国で実施されている統一試験とその中で行なわれている英語リスニング・テストについて調査を行なった。大学進学に対する国民的関心が非常に高い韓国では、日本とは異なった管理・運営が行なわれており、特に試験問題の漏洩には細心の注意と措置が講じられていることが判り有意義であった。また、リスニング・テストについても既に10年ほどの経験を有

しており、試験問題の作成から録音、編集、配布にわたる全工程を詳細に説明していただき、今後我が国に同様の試験を導入する際に大いに参考になると思われる。加えて、作題システムについても各委員の役割や人数、作業日程等多岐にわたって紹介いただけたことは、システム全体を把握する上で非常に役立った。今後ともKICEをはじめ、各国の試験実施機関との良好な関係を保ち、お互いに情報を交換しながら日本の統一試験とその改革に有効な情報提供を行なっていけるよう努力する所存である。

最後になったが、今回のKICE訪問に際し、先方の置かれている状況が急変している時期にも係わらずKyung-Ae Jin 博士をはじめKICEの多くのスタッフの方々には非常に丁寧に対応いただいた。この場を借りて謝意を表しておく。

[参考文献]

- 1) 大学入試センター(2002), 国際シンポジウム「問題作成からみる大学入試」予稿集.
- 2) 櫻井 捷海, 浅野 攝郎(2003), CSAT-2003翻訳メモ.
- 3) Yang-Rak Lee(2003), KICE配布資料.
- 4) 海外職業訓練協会(2003), 韓国の教育事情,  
<http://www.ovta.or.jp/info/asia/korea/04education.html>.